英語教師のための
基礎講座

授業マネージメントの勘どころ：指導言の改善を求めて（2）

田邉祐司　Tanabe Yuji
（専修大学）

1 はじめに

前回は発問，指名，指示といった指導言に関する熟練教師３名の勘どころを概観しました。今回は，授業の要とも呼べる「説明」を取り上げ，彼らが説明にいかなる工夫を施しているのかを紹介します。

2 説明というカンナがけ

「説明」を英語でいうと，もちろん explanation ですね。語源には「カンナ（plane）をかけて，完全に（ex）平らにすること」とあります。つまり，カンナを使うように，生徒が教材内容を理解しようとする道程をツルツルにしてあげることがこの言葉の本義といえるのです。カンナがけが必要となるのは，1）発音，2）文法事項，3）語や連語，慣用表現，4）文の意味や構造，5）文と文との関係，6）パラグラフやひとつの課全体などの意味や要旨，7）教材に関係ある文化的背景，8）日英両語の発想や考え方の違い，などの指導過程が考えられます（垣田 編 1981）。

こうして見ると，その頻度と内容から，説明が授業を成立させるための欠かさざる重要な授業行為であるということに改めて気づきます。しかし自戒を込め述べますと，ともすれば教え込もうとする余り，一方通行的にしゃべりまくって，いつの間にか生徒を置いてけぼりにすることがあります（自戒を込め！）。理解の過程をツルツルどころか逆にデコボコ（凸凹）にしては元も子もありません。当然，3名の教師は「説明」というカンナがけを授業マネージメントの大きなポイントとして押さえています。

3 インタラクティブなカンナがけ

カンナのかけ方は演繹的なものと帰納的なものとに大別できます。どちらがどうだ，という二分法ではなく，私たちは授業目標，配分，時間，生徒のレベル（しばしば直感も！）などに応じて，カンナのかけ方を変えていると思います。この要所で３人に共通しているのが，しゃべり倒して煙に巻くという手法はほとんど用いないということです（ちなみに英語には long-winded という表現があり，school teacher の代名詞になっています！）。

C 先生は，文法事項であろうと文構造であろうと，一方的に説明する手法は採りません。先生のいう説明は，生徒の既知知識を喚起しながら，発問，指名，例示などでゆさぶりを繰り返し，所定の項目を彼ら自身が学びとるようにする手法です。この間，生徒の反応を注視し，どこまで理解しているのかを測りながら，その仕方を変えていきます。そして最後は生徒自身が「あー，わかった！」と納得するようなカンナがけを心がけているのです。C 先生は教師が中心に行う説明というものすらインタラクティブなものに変容させているのです。

A 先生は基本的には C 先生と同じ“インタラクティブ派”なのですが，彼の場合，さらにイラスト，図，写真，記号や写真などをふんだんに使いながら，理解過程をツルツルにする工夫をしています。これは口頭だけの説明では限界を感じるようになったという自身の体験からだそうです。

A 先生は「話だけではよく理解できない生徒が増えてきている気がします。TV でも日本語で語っているのにやたらテロップが入っていますよね。あれはおそらくはこうしたケータイ年代の聞く力の欠如を TV 局側が敏感に感じ取っているからではないでしょうか。」と話してくれました。

視覚情報に依存する傾向がある現代っ子を逆手にとった A 先生のこの手法は，1 年間美術部に出入りし，デザインの基本を部員とともに徹底的に学んだ

成果だそうです。また先生は英語教師が他教科の同僚の授業を参観することも奨めています。社会科では生徒に身近な事例を使いながら今の社会をつかませようとするし，数学科の記号となったロジックを用い，多言を要さないコンパクトな説明法には英語科教育も見習うべきものがあると考えています。

4 ワークによるカンナがけ

B 先生の「説明」で特徴的なのが，説明の代わりに作業（work）をさせるというものです。例えば辞書引き。語彙，文法・語法，文化などの項目を説明する場合，先生は口頭であれこれと言わず，辞書引きという作業に生徒を誘います。彼らが先生の“Look it up in your dictionary!”の指示と同時に辞書を引き始める様は壮観でさえあります。

数量形容詞“many”の用法の例では，日本語の「多数の，多くの，たくさんの」という意味からの干渉（negative transfer）により，生徒の多くが“Many students...”という英文を産出することがあります。これに対して B 先生は，「many は～である」という公式的な説明，すなわち答えを提示するのではなく，辞書という「言葉の銀行」に一緒に行って調べようという形を大切にしています：

> 『初級クラウン英和辞典』で“many”を引くと，「特に話しことばでは，many はふつう疑問文・否定文で使われる；肯定文で使うと形式張った感じになるので，many の代わりに a lot of, lots of, plenty of, a great many などを使うことが多い。」という記述があります。
>
> この記述を最初に発見した生徒にその部分を読ませ，全員にマーカーでチェックを入れさせます。さらに例文をみると，確かに疑問文や否定文での用例があり，“many”が使われるのは疑問文や否定文に多く，肯定文（特に話し言葉）ではあまり使われないことを理解してくれます。こうした作業を説明と呼んでいいかどうかは心もとないのですが，このように一緒に調べてみるという過程を取り入れるようになってから，生徒の理解度，英語への興味は目に見える形で変化してきました。もちろん田邉スクールの一員として，最後には辞書に付せん紙を貼らせ，辞書を太らせています！（笑）

5 メディアによるカンナがけ

C 先生もまた，共同作業的な説明を優先していますが，違うのは歌，映画，sit-com などのメディアを活用し，それらの視聴から生徒に気づきを起こさせ，項目を理解させる手法をとっていることです：

> “will”と“be going to”の微妙な違いを説明する場合には，まず「英語のプロポーズの言葉は？」という発問からはじめます。そしてその場面を集めたビデオクリップをいくつか視聴させます。“marry me”という表現の解説はもちろん必要ですが，ペアでガヤガヤとやらせているうちに，生徒はやがて“Will you marry me?”と言っていることに気づきます。そこから人の意思が強く出る will の意味をつかまえさせます。
>
> 次に「じゃあ“Are you going to marry me?”というのはプロポーズのときに使うのだろうか？」という発問でさらに考えさせ，最後は“will”と“be going to”の押さえにかかるのです。この間，「意志未来」とか「近接未来」などという用語は使いません。あくまで彼らの知性と感性に訴えかける形の働きかけを説明としてとらえています。

6 おわりに

３人が勘どころにしているのは，教師がしゃべり倒すような説明手法ではなく，むしろ生徒を巻き込む形の説明のあり方でした。彼らの授業を見学したあと，説明の仕方にはまだまだ改善の余地があることを痛感し，なぜだかノーベル文学賞作家 Patrick White（1912-1990）の言葉を思い出しました。

“I forget what I was taught.
I only remember what I have learned.”

【参考文献】
垣田直巳 編（1981）．『英語科重要用語 30 の基礎知識』明治図書出版．
田島伸悟・三省堂編修所　編（2012）．『初級クラウン英和辞典 12 版』三省堂．